

文学部

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

文学部は、各学科の専門性の涵養だけでなく、学問的成果を説得力ある文章にする力を育成することにも重点を置いている。多くの学生にゼミでのレポートや卒業論文を通じてこうした指導を行うことは、教員にとって大変な負担であろう。会議や自己点検・評価作業の合理化により、教員の負担の一部が軽減されたことは望ましい。学習成果の可視化に関しては、優秀論文を学内誌に掲載したり、全国学会へ推薦するという現在の取り組みは、学生に具体的な目標と手本を示すという意味で意義あるものであり、こうした試みがさらに拡大し、成果を上げることが期待したい。

一方で、留学生の数が増加する中、彼らが学部での学習や卒業後の進路にどのような問題を抱えたり希望を抱いているかを把握し、指導体制を整備することは喫緊の課題であろう。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

これまで文学部では、ゼミナールと卒業論文を必修科目とすることにより、研究発表や討論、レポートや論文執筆を通して学修成果の把握に努めてきた。2019年度は全学的な方針のもと、「学修成果の把握に関する方針(アセスメント・ポリシー)」を作成することにより、入学時から卒業時までの学修成果の把握方針を定めるなかで、これらについても重要な位置づけを行った。くわえて、文学部質保証委員会において、卒業論文の評価と4年間の成績評価の関連性を調査し、卒業論文の評価を重要な指標に用いることの有効性を確認した。

一方、留学生指導に関しては、市ヶ谷地区で最多の私費留学生を受け入れている文学部においては、大きな課題となっている。これまでも日本文学科では留学生サポート小委員会を設けてきたが、2018年度からは地理学科でも留学生支援の学生活動を開始し、新入生の留学生に履修・学修指導等を行っている。また、他の学科においても、1年次春学期に留学生を含む全学生の面談を行い、学修に対する意欲を確認し、要望を聞きとる活動を行っている。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

文学部では、教育目標を実現するために、ゼミナールとその成果である卒業論文を中心に据えた教育を行っている。2019年度は「学修成果の把握に関する方針(アセスメント・ポリシー)」を作成し、入学時から卒業時までの学修成果の把握方針を定めるなかで、これらについても重要な位置づけを行った。くわえて、質保証委員会において、卒業論文の評価と4年間の成績評価に相関関係があることを確認し、学部で共有できたことは評価できる。そのために、初年次から卒業論文に到るまで、教員が個々に指導している点も評価したい。

その一方で、課題もある。現在、数多くの留学生が在籍しているが、学習指導や支援体制についての継続的な取り組みが期待される。また、回答率の低い「学生による授業改善アンケート」についても、利用方法についての検討が必要と思われる。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、学科ごとに概論科目と多様な講義科目を設け、専門分野の学問内容を深く、かつ網羅的に学べるカリキュラムを構築している。また、ゼミナール科目を年次ごとに多数開講することによって、専門分野の研究方法を身につけ、プレゼンテーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。特に、ゼミナールとその延長にあたる卒業論文は必修科目として位置づけられており、文学部の教育の最大の特徴となっている(SS1学生は選択制)。また、哲学・英文学・史学・心理学の各学科では、大学院科目の履修も認めており、自身の学修活動をより高度なものへと高める場も設けている。さらに、幅広い教養の涵養を図るためのILAC科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目等を含めることにより、幅広い視野と教養を身につけることが可能となっている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。

**【哲学科】**

専門科目の中心に位置付けられる「哲学特講」(2～4年次)、「哲学演習」(3・4年次)については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春・秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。

**【日本文学科】**

2年次以降は文学・言語・文芸の3コース制を採用している。学生はコース別の必修科目と「ゼミナール」、および各コース共通で履修できる選択必修科目・選択科目を通して、諸領域にわたる知識を深く身につけることができる。なお、文芸コースでは原則として卒業制作(創作作品)を提出することとなっている。

**【英文学科】**

「英語という言葉が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。また、英文学科派遣留学制度(SA)を設けて国際化に対応し、国際社会に貢献しうる能力をもった人材を育成している。

**【史学科】**

専門基礎科目、専攻系科目、特講系科目、実習系科目、演習(ゼミ)に分け、学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を史料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識にわたり、包括的かつ実践的に習得できるカリキュラムを構築している。

**【地理学科】**

1年次に「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得し、2年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図ることとしている。

**【心理学科】**

論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1～4年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。また、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、講演会を実施している。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科の学科会議においてカリキュラムの検討を行った。その結果、哲学科において、2020年度以降、大学院人文科学研究科哲学専攻開講科目の履修可能単位数を4単位から8単位へ引き上げ、専門性の高い授業を履修する機会を拡大した。

**【根拠資料】** ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー  
(<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>)
- ・文学部履修の手引き (<https://hosei-rinji.com/letters/tebiki/>)
- ・web シラバス・文学部 ([https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AB&t\\_mode=pc](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AB&t_mode=pc))
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)  
([https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX&t\\_mode=pc](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX&t_mode=pc))
- ※以下、文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、文学部履修の手引き、web シラバスについては URL を省略する。
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配付パンフレット)
- ・法政心理ネット (<http://www.hosei-shinri.jp/>)
- ・2019年度第7回文学部定例教授会議事録

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。 S  A B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

各学科とも、1年次に初年次教育にあたる「基礎ゼミ」(日本文学科のみ「大学での国語力」「ゼミナール入門」として実施。以下、これらを「基礎ゼミ」等と略す)や概論科目を、2年次以降、より専門性の高い科目を開設している。また、2～3年次ないし3～4年次に「ゼミナール」「演習」(各学科で名称を異にするため、以下、最も代表的な呼称である「ゼミナール」「演習」と称す)を開設し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施している。4年次には全学科で「卒業論文」を必修として課すことにより、論理的な思考力・表現力の養成に力を入れている。各科目は、必修科目・選択必修科目・選

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

択科目・自由科目（心理学科のみ、必修科目・学科基礎科目・展開科目・自由科目と称す）の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。また、1年次より学科の専門科目とILAC科目の双方が学べるよう配慮されている。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。また、その体系は学科ごとにカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの形式でも公開している。

**【哲学科】**

ゼミ形式の授業として、1年次に「基礎ゼミ」、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「哲学演習」を開設し、4年間を通じて段階的で継続した能力形成が可能なカリキュラムとなっている。また、1・2年次に概論科目、ILAC科目を履修したあと、2・3年次に特殊講義、選択科目の履修を通じて視野の拡大を図り、広い教養に支えられた専門性の証としての「卒業論文」の執筆につなげている。

**【日本文学科】**

1年次春学期に国語基礎力育成のため「大学での国語力」、秋学科にゼミ教育への導入として「ゼミナール入門」を開設している。2年次からは文学・言語・文芸の3コース制を取り、学生は「ゼミナール」の所属によって所属コースが決まる。各コースのカリキュラムは、共通の必修科目3科目（1年次ないし2年次以降開設）を土台に、コース別必修科目2科目を柱とし、さらに選択必修、選択、自由科目を配することにより体系化されており、卒業論文・卒業制作につなげている。

**【英文学科】**

1年次には初年次教育として「基礎ゼミ」を開設するほか、英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を履修可能としている。2年次以降、専門的内容をもつ講義科目や、英語力の集中的な育成を図るための英語表現演習科目を開設している。また、2年次春学期にはゼミにおける専門研究への導入の

ため、「2年次演習」を開設している。3年次からは英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野のゼミを開設し、卒業論文執筆に向けた指導を行っている。

**【史学科】**

1年次に導入科目として「基礎ゼミ」を開設するほか、日本史・東洋史・西洋史の各概説および各序説を開設している。2年次には、基本的な方法論の習得のため「史学概論」「考古学概論」を開設している。2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の3専攻制を取り、専攻系（時代史）講義科目で専攻分野の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目への連絡を図っている。さらに、研究方法習得のための演習（ゼミ）と、史資料の扱い方、外国語論文読解力養成のための実習系科目を開設している。これらの科目を2・3年次に履修することで、4年次の卒業論文執筆に結びつけている。

**【地理学科】**

1年次に「基礎ゼミ」のほか、地理学の体系と方法論の基礎を習得するための「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」を開設している。2年次からは選択必修科目、選択科目によって多岐にわたる知識、方法論を学び、習得した方法論を「現地研究」(フィールドワーク)において実践する。2017年度入学生以降は3・4年次における「演習」の履修により、4年次の「卒業論文」につなげる編成をとる。

**【心理学科】**

認知系科目群と発達系科目群を柱に、体系的な教育課程を編成している。1年次には学科基礎科目を設置し、2年次からは専門性の高い学科展開科目を比較的自由に履修できるよう設置している。また、1年次には初年次教育としての「基礎ゼミ」、心理学への興味を高め、基礎的なスキルを習得するための「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」、2年次には研究論文の読み方や実験方法を学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」、3年次以降は心理学分野での研究活動を一人で行うことにより、それまでに習得した知識・技能を活用する方法を学ぶ「研究法Ⅰ・Ⅱ」を設置し、最終的に4年次の「卒業論文」につなげられるように編成している。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー
- ・文学部履修の手引き
- ・web シラバス・文学部

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

**S** A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

各学科とも幅広く深い教養を習得することと、学科の専門性の高い知識・方法を習得することを両立し、総合的な見識や判断力を養成することを重視している。そのため、卒業所要単位数 132 単位のうち、44 単位を ILAC 科目より修得することが定められている。ILAC 科目は 0 群、1 群（人文科学分野）、2 群（社会科学分野）、3 群（自然科学分野）、4 群（外国語）、5 群（保健体育分野）から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC 科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」「教養ゼミ」も設けられており、ここで修得した単位は専門科目のうち、自由科目として認定されている（哲学科・日本文学科・英文学科では、「総合科目」の一部が専門科目のうちの選択科目として位置づけられている）。加えて、文学部内では学科間で科目の共有が行われているほか、2 年次からは他学部・他学科公開科目も履修可能となっており、隣接する領域や他の専門領域をより深く学ぶ場が提供されている。特に、他学部公開科目においては「法政大学 SDGs サティフィケート」を設け、SDGs の 17 の各目標に沿った科目を体系的に履修できる制度を、全学的な意思決定にもとづき、2019 年度から導入している。

なお、文学部では 2011 年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」を開講していることも、特徴としてあげられる。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

2019 年度秋学期より、日本文学科が千代田区キャンパスコンソーシアム単位互換に参加し、参加大学が提供する幅広い科目の受講が可能となった。また、史学科・地理学科・心理学科でも、2020 年度春学期からの参加を決定した。

また、市ヶ谷コミュニティ連携会議における策定にもとづき、2020 年度より「アーバンデザイン・サティフィケート」に参加すること、「文化地理学(1)・(2)」を提供することを決定した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部履修の手引き
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）
- ・2019 年度第 1・7 回文学部定例教授会議事録

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S  A  B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科では ILAC 科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。

一方、高大接続に関しては、法政大学高等学校 3 年生を対象に一部の専門科目の聴講を認めている（ただし、まだ実績はない）。

なお、上記以外の学科固有の取り組みとして、以下のものがあげられる。

【史学科】

史学科では日本史・東洋史・西洋史を広く学ぶカリキュラムが設定されているため、高等学校までの日本史・世界史の学習状況を考慮し、必ずしも学習が十分でない者を主な対象として、2017 年度から各分野の通史を 1 セメスターで学ぶ「日本史序説 I・II」「東洋史序説」「西洋史序説」を開講し、他学科にも公開している。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部履修の手引き
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S  A  B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目に指定している。また、英語強化プログラム（ERP）、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム（ESOP）のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている（英文学科では一部、選択必修科目に認定されている）。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

**【哲学科】**

2011年度より「国際哲学特講」を開講している。本科目ではハイデルベルク大学（ドイツ）、ストラスブール大学（フランス）と提携し、スカイプを用いた遠隔授業とアルザス欧州日本学研究所における合同授業を実施している。海外の大学の学生と交流・議論するとともに、現地の文化に直接触れることで、異文化への関心の喚起、自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる。

**【日本文学科】**

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに、中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。**【英文学科】**

米国のフォントボン大学の秋学期 SA（長期）、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏期 SA（短期）と秋学期 SA（長期）という3種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度（SA）を設け、短期 SA については1年次からの参加を積極的に勧めている。2020年度からはカナダのヴィクトリア大学の秋学期 SA（長期）も開始される。プログラム終了後には毎年 SA 報告会を開いている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA 認定科目として認定している。

※2020年度の各 SA は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、中止となった。

**【史学科】**

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。

**【地理学科】**

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾・中国をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

**【心理学科】**

多くの留学生を積極的に受け入れている。また、「演習 I」などの演習系科目や、「心理学英語 I・II」を通じて、英文学術雑誌の講読を行い、国際的な場での発表を可能にする語学力の養成に努めている。さらに、専任教員が主導して大学院入試を視野に入れた自主英語勉強会を定期的開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

史学科では国際性涵養の一環として復旦大学文物與博物館学系の協力のもと学生が主体的に学習プログラムを組み、相互に研究発表など意見交換の場をつくる取り組み（2019年度は南京師範大学にて開催）を展開し始めた。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部履修の手引き
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配布資料）
- ・南京師範大学のホームページ掲載の交流関連記事（<http://www.njnu.edu.cn/info/1038/12301.htm>）

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S  A B

**※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。**

ILAC 科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」（ともに1年次）、「就業基礎力養成」（1～4年次）を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」（2～4年次）を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている。

なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

**【哲学科】**

哲学科生に向けた「哲学科就職セミナー」を年1回開催し、キャリアセンター職員や卒業生などによる講演を行い、就職活動を含め、キャリア形成に向けた情報提供と学生の意識向上を図っている。

**【日本文学科】**

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「メディアと社会」「編集理論 A・B」「編集実務 A・B」「表現と著作権」を開設し、出版業界への就職を希望する学生に向けたキャリア教育を実施している。

【史学科・心理学科】

「基礎ゼミ」においてキャリアセンター職員によるガイダンスを実施し、学生が1年次よりキャリア形成に向けた意識を高める取り組みを行っている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。  
特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部履修の手引き
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
- ・哲学科サイト (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>) に「哲学科就職セミナー」案内掲載

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

各学科専任教員：4月にオリエンテーション（1年次生対象）、在学生ガイダンス（2年次以降の学生対象）を実施。

- ・学務部学部事務課文学部担当：4月に学部ガイダンス（1年次生対象）を実施。  
そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・新生生に対して、履修・学習状況等を確認しながら、専任教員が面接を行い、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。
- ・4月に4年生を対象に卒論ガイダンスを実施している。

【日本文学科】

- ・学科内留学生サポート小委員会による「留学生履修相談会」を開催している。
- ・新生生を対象とした懇談会として、4月に「新生生歓迎会」を実施している。同時に、オフィスアワーの利用促進を図るため、研究室案内も実施している。
- ・1年次後半に「コース・ガイダンス」および「ゼミ説明会」を開催し、3コース制やゼミナールに関する説明を行っている。
- ・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。
- ・4年次への進級や卒業履修要件の充足をめざし、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。
- ・『卒業論文執筆のてびき』を配布し、卒業論文（卒業制作）の指導を行っている。

【英文学科】

- ・例年4月に「新生生歓迎会」を実施している。
- ・例年5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新生生面談」を行ない、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。
- ・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。

【史学科】

- ・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新生生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。
- ・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。

【地理学科】

- ・新生生が履修を決めたり、登録手続きをする際に混乱するのを軽減したりするため、新生生向けに地理学科在学生による履修ガイダンスを実施している。
- ・新生生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新生生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・秋学期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選出手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。
- ・地理学科オリジナルの葉を配付し、「文学部履修の手引き」に書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。

**【心理学科】**

- ・1年生に対しては、専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会を通じて履修指導を行っている。学科のカリキュラムなどを解説した独自の資料もオリエンテーションで配付している。  
[注] ピアサポート・システムとは、ピアカウンセリングを活用したもので、互いの人間的成長能力を信じ、「支援する存在」でもあり「支援される存在」でもあるという互恵性を高めることによって、学習環境をポジティブな風土にし、個々の学生の能力を伸ばすシステムである。ピアサポーターは、活発な活動を行っている。
- ・2～4年生に対しては、学科のカリキュラムを解説した独自の資料を作成し、在学生ガイダンスで配付している。
- ・2年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会も行っている。

※2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響による休講措置にともない、年度初めに実施するオリエンテーション、ガイダンス、歓迎会等は、web上で資料提供、解説動画の公開等の方式に切り替えて実施した。また、web会議システムを利用し、履修相談等も実施した。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度より、ラーニングサポーター制度が導入され、この制度を利用して、地理学科では新入学生を対象とした4年生(4名)による履修ガイダンス(2019年4/4、4/5、両日も午後3時から2時間)を実施した。構成が多岐にわたり、その選択方法が分かりにくいリベラルアーツ科目を中心に、教職、資格課程などについても履修指導を行い、ガイダンスに参加した1年生(参加人数4/4:30名、4/5:40名)からは好評を博した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

**【哲学科】** 新入生ガイダンス配付資料、在学生ガイダンス配付資料

**【日本文学科】** 『卒業論文執筆のてびき 第7版』、留学生サポート小委員会履修相談資料

日本文学科サイト・専門科目の履修モデル ([http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page\\_id=1153](http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153))

日本文学科サイト・日本文学科3年次履修チェックリスト

(<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eccc19dcead869fe.pdf>)

**【英文学科】** 新入生ガイダンスと在学生ガイダンス用に、web掲示板の掲示と音声入りPPTを公開

**【史学科】** 在学生ガイダンス配付資料

**【地理学科】** 『地理学科の葉』

地理学科サイト geo-net (<https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/>)

**【心理学科】** 心理学科新入生オリエンテーション配付資料、心理学科在学生ガイダンス配付資料

②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S	A	B
----------------------	---	---	---

**※取り組み概要を記入。**

すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を「文学部履修の手引き」に公開し、個々の学生への学習相談に対応している。

また、各学科とも1年生に対しては「基礎ゼミ」等において、2年生以上に対しては「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。さらに、4年生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、「文学部履修の手引き」において公開されている。

一方、成績不振学生に対しては、各学期、教員との面談形式による学修指導を行い、その結果を学科で集約し、教学改革委員会で報告することとしている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

面談に訪れない成績不振学生に対し、学部事務課文学部担当より来訪を要請する郵便を送付する制度を導入した。その結果、面談の実施率が高まった。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部履修の手引き
- ・2019年度第4・8回教学改革委員会議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S <b>A</b> B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」「参考書」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。また、講義科目においては適宜レポート等を課して授業外学習の時間を増やすほか、小テストの実施などを通して予習・復習の促進も図られている。「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、レポート執筆や口頭発表に向けた調査・研究を授業外に実施するほか、必要に応じて学生同士のサブゼミも開催されている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文学部履修の手引き</li> <li>・web シラバス・文学部</li> </ul>	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <b>A</b> B
<p><b>【具体的な科目名および授業形態・内容等】</b> ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文学部ではアクティブ・ラーニングを「講義内容に関連して、学生が書く、話す、発表するといった能動的活動を行い、気づき、発見、認知の変化などが確認できる、あらゆる学習活動である」ととらえ、「基礎ゼミ」「ゼミナール」「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できる仕組みを積極的に導入することを心がけている。</li> <li>・大教室における講義科目でも、リアクション・ペーパーや学習支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。 そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。</li> </ul> <p><b>【哲学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎ゼミ」ではグループワークや討論を通じて学生間の意見交換を促進している。「基礎演習」「哲学演習」ではアクティブ・ラーニング形式の授業を採用している。</li> <li>・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。</li> </ul> <p><b>【日本文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「編集実務A・B」で、学生は、DTPソフトを使用して書籍や雑誌の誌面デザインを行ったり、小冊子の制作を行ったりしている。</li> <li>・複数の「ゼミナール」で、学生は、直接、古典籍（写本や版本）に触れて研究を行っている。</li> <li>・複数の「ゼミナール」で、学生は、論文や小説などを編集し、ゼミ誌を作成している。</li> </ul> <p><b>【英文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎ゼミ」、「2年次演習」、そして「ゼミ」で学生に発表を課すのに加え、グループワークや相互フィードバックを通じて学生間の意見交換を促進している。</li> <li>・また、「英語表現演習（Speaking）」、「英語表現演習（Writing）」において学生に英語で話したり書いたりする機会を継続的に提供している。</li> </ul> <p><b>【史学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎ゼミ」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。</li> </ul> <p><b>【地理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎ゼミ」「現地研究」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。</li> </ul> <p><b>【心理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業における先進的取り組みについては下記根拠資料にまとめている。そのほか、2016年度からは「心理学測定法I」と「演習II」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。また、多くの授業で学生による発表などアクティブ・ラーニングを実施している。</li> </ul>	
<p><b>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 第6回教授会において、教育支援課根橋巧主任による授業支援システム、剽窃チェックソフトの利用法に関する研修会を実施した。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



2019年11月27日に学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、リアクション・ペーパーの活用事例・課題に関する聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、リアクション・ペーパーの効果的な活用法について情報を共有した。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・web シラバス・文学部
- ・2019年度第6・11回文学部定例教授会議事録

【**地理学科**】『地理学科の葉』

地理学科サイト geo-net (<https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/>)

【**心理学科**】「2015年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書（2016年度心理学科会議資料）

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S  A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC 科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。

そのほか、各学科では以下のような配慮を行っている。

【**哲学科**】

「哲学演習」では、授業形態にふさわしい人数になるように、学生の希望も精査しつつ学科全体で調整している。

【**日本文学科**】

必修科目（「日本文芸学概論A・B」「日本語学概論A・B」「日本文芸史IA・B」）・コース別必修科目（「文学概論A・B」「日本文芸史IIA・B」「日本語史A・B」「日本文法論A・B」「日本文学史A・B」「文章表現論A・B」）では、昼間・夜間に同じ授業を1コマずつ開講し、履修者が最大でも150名程度になるよう配慮している。

【**英文学科**】

ゼミと異なり、授業間で内容が大幅に異ならないと想定される「英語表現演習」について、各コマの最大履修者人数の上限を40名とするよう、担当教員に依頼している。

【**史学科**】

実習系の「日本考古資料学」「日本近世史科学」等では、学生の専攻を優先して履修者を選抜することで、規模の適正化を図っている。

【**地理学科**】

実験・実習科目において、履修者数が10名を超える場合、TA（教育補助員）を1名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。また、必修科目の「地理実習(1)・(2)」や選択必修の「地学実験(1)・(2)」では、履修者を二つのクラスに分けて春秋で(1)・(2)の履修の順番を代えて受講することで実験室の収容数以内で実習できるようにしている。

【**心理学科**】

「心理学基礎実験I・II」「心理学測定法I・II」「心理検査法I・II」「心理統計法実習I・II」「情報処理技法I・II」においてはクラス指定制を取り、1授業あたりの履修者が30～40名程度になるように調整している。

【**2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・web シラバス・文学部

【**哲学科**】「哲学演習」の受講者制限について」（配付プリント）

【**日本文学科**】ゼミ説明会配付資料

【**心理学科**】「心理学科在学生ガイダンス配付資料」

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S  A B

【**確認体制および方法**】※箇条書きで記入。

- ・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。
- ・すべての科目の成績評価・単位認定基準は「文学部履修の手引き」に公表されている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。</li> <li>学生に対して成績調査の申請機会を保証し、教授会では必要に応じて成績訂正について審議している。 そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。</li> </ul> <p><b>【哲学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「哲学演習」として開設されている 11 の演習科目をはじめ、ゼミ科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一している。</li> </ul> <p><b>【日本文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オムニバス授業「日本文芸学概論 A・B」（必修科目）の成績評価は、学科会議の審議事項としている。</li> <li>「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ、成績を決定している。</li> </ul> <p><b>【英文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「基礎ゼミ」では、複数クラス間で成績評価に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえで成績を決定している。</li> <li>卒業論文の評価基準をあらかじめ公開している。</li> </ul> <p><b>【史学科・心理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>シラバス以外でも、卒業論文の審査基準を文書化し、あらかじめ公開している。</li> </ul> <p><b>【地理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業論文の評価を全教員で協議のうえ決定している。</li> </ul> <p><b>【心理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業論文の口述試験を学科全体の発表会形式で実施し、その成績を全教員が協議のうえ決定している。</li> </ul>	
<p><b>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文学部履修の手引き</li> <li><b>【日本文学科】</b> 学科会議資料、「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料</li> <li><b>【史学科】</b> 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配付資料）</li> <li><b>【心理学科】</b> 「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表」 (<a href="http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf">http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf</a>)</li> </ul>	
②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S A B
<p><b>※取り組み概要を記入。</b></p> <p>厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。担当教員もそれを踏まえ、成績評価を行っている。また、GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。教授会においても、学部長より全学的な GPCA の傾向が適宜報告されている。</p> <p>なお、講義科目における S の付与は、認定単位のうち 20%以内を目途とすることが承認されている。 そのほか、特定の科目の成績評価に対する厳格な方法については、前記 1.3①参照。</p>	
<p><b>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019 年度に成績評価基準が変更になったことにもない、第 3 回文学部定例教授会において、各授業における S 評価の割合について承認した。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>web シラバス・文学部</li> <li>2019 年度第 3・4 回文学部定例教授会議事録</li> </ul>	
③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい いいえ
<p><b>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の就職・進学状況については、教授会およびメーリングリストにおいてキャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。</li> <li>その他、学科会議においても、学生の就職・進学状況について報告・確認がなされている。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2019 年度第 3 回文学部定例教授会議事録</li> </ul>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・成績分布については、GPCA 集計表を各学科により個々の教員が確認できる状態になっている。</li> <li>・進級・留級については、教授会の審議事項としている。</li> </ul> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2019 年度第 10・11 回文学部定例教授会議事録</li> </ul>	
②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>文学部および各学科では「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」を定め、公表している。ここでは、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに照らして、入学段階、初年次教育、専門科目・市ヶ谷リベラルアーツ科目等、ゼミナール、卒業時における学修成果測定のための指標と検証の方法を明示している。</p> <p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>文学部および各学科において「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」を制定した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2019 年度第 4 回文学部定例教授会議事録</li> <li>・大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部 (<a href="https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/">https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/</a>)</li> <li>・文学部履修の手引き</li> </ul>	
③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <p>文学部および各学科の「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」にもとづき、以下のように学修成果の把握・評価を行っている。即ち、初年次教育では「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、大学での学修に必要なスキルと主体的な学習態度を身につけたか、把握している。専門科目・ILAC 科目等では期末試験、レポート、小テスト、リアクション・ペーパー等を通じて、専門分野の学問内容・研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握している。ゼミナールでは研究発表やレポートを通じて、課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握している。卒業時には卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握している。なお、文学部では卒業論文が必修であるため、4 年間の学習成果は論文本体および口述試験によって、総括的に把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。</p> <p>なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <p>哲学的な議論や主張ができるための正確な文章力の習得を重要な教育上の目標として、3～4 年次の演習授業、4 年次の卒業論文作成の前提として 2 年次学生向けに「基礎演習」を実施し、レポート作成を通じた文章力の養成・指導に取り組んでいる。</p> <p>【地理学科】</p> <p>教員免許、測量士補、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。</p> <p>【心理学科】</p> <p>個々の学生が取り組む卒論研究については、研究計画書を提出し、倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で全教員が全学生の研究計画書を読んでいる。倫理審査の目的は研究計画の適切さを評価することにあるが、同時にこの仕組みは、研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術など、個々の学生のそれまでの学習成果を把握するのにも役立っている。</p> <p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1.5①参照。	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部 (<a href="https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/">https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/</a>)</li> <li>学習成果を把握（測定）する方法・文学部 (<a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/1715/8563/7329/04_.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/1715/8563/7329/04_.pdf</a>)</li> <li>web シラバス・文学部</li> </ul>	
④学習成果を可視化していますか。	S <b>A</b> B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <p>各学科の取り組みは以下のとおりである。</p> <p><b>【哲学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業論文タイトル一覧の公表。</li> <li>一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。</li> <li>一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。</li> <li>「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。</li> </ul> <p><b>【日本文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。</li> <li>「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学習成果を公表。</li> </ul> <p><b>【英文学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。</li> <li>学科生の団体 Links において、学生がゼミでの学習状況等を発表。</li> <li>学科 SA 報告会において海外留学の成果を発表。</li> </ul> <p><b>【史学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。</li> <li>全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。</li> </ul> <p><b>【地理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学科と卒業生と学生で組織する学会が連携した卒業論文発表大会の実施。各ゼミ活動についてもポスターにて発表。</li> <li>全国地理学専攻学生卒業論文大会（日本地理教育学会主催）へのエントリー。</li> <li>『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。</li> </ul> <p><b>【心理学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業論文の発表会でのプレゼンテーションに加え、研究成果をA4判1ページの要旨としてまとめて配付するほか、法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」で公表。</li> </ul> <p><b>【2019年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>【哲学科】</b> 哲学科サイト (<a href="https://philos.ws.hosei.ac.jp/">https://philos.ws.hosei.ac.jp/</a>)</li> <li><b>【日本文学科】</b> 『日本文学誌要』『法政文芸』</li> <li><b>【英文学科】</b> 『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）</li> <li><b>【史学科】</b> 『法政史学』、地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」 (<a href="http://chihoshi.jp/?p=1877">http://chihoshi.jp/?p=1877</a>)</li> <li><b>【地理学科】</b> 『法政地理』、法政大学地理学会サイト (<a href="http://www.chiri.info/index.html">http://www.chiri.info/index.html</a>) 日本地理教育学会サイト (<a href="http://www.geoedu.jp/sotupro2019.pdf">http://www.geoedu.jp/sotupro2019.pdf</a>)</li> <li><b>【心理学科】</b> 「修士論文・卒業論文要旨集」『法政心理学会年報』</li> </ul>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S <b>A</b> B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。加えて、「学生モニター制度」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。</p> <p>また、各学科では学科会議やFD ミーティングにおいて、学習成果の検証とそれにもとづく教育課程・内容・方法の改善について審議している。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>第5回教授会において、安孫子信教授、小原文明准教授による研修会「学修成果の把握について」を実施した。</p> <p>文学部質保証委員会において、優秀な卒業論文を書いた学生の学修活動について調査を行い、その結果を第7回教授会で報告した。</p> <p>2019年11月27日に学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、学修成果の把握方法に関する意見・要望を聞きとり、第11回教授会で報告した。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2019年度第5・7・11回文学部定例教授会議事録</p>	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	<p>S <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">A</span> B</p>
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことをシラバスのうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。</li> <li>・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。</li> <li>・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることもある。</li> <li>・ただし、現行のアンケートは評価・回答方法のあり方、回答率の低さなどから、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには利用しにくいという声もある。</li> </ul>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・web シラバス・文学部</p>	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部および各学科の PDCA サイクルが円滑に機能し、カリキュラムの点検を不断に行い、教育改善に努めている。</li> <li>・教育課程の編成・実施方針にもとづき、「ゼミナール」「演習」「卒業論文」を必修とするほか、これらに対応する基礎力を養成するための「基礎ゼミ」等を開講している。</li> <li>・アクティブ・ラーニングや学修成果の測定をめぐる、教授会、執行部、文学部質保証委員会等が普及、検証、向上に向けた取り組みを行っている。</li> </ul>	<p>1.1① 1.1①② 1.4②③、1.5①</p>

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし。</li> </ul>	

**【この基準の大学評価】**

<p>文学部では、課題発見・解決能力を重視し、卒業論文を必修科目に位置づけている。また、学部および各学科でカリキュラムの点検を不断に行い教育改善に努めている。2019年度における検討の結果、哲学科において、2020年度以降、人文科学研究科哲学専攻開講科目の履修可能単位数を4単位から8単位へ引き上げ、専門性の高い授業を履修する機会を拡大したことは評価できる。</p> <p>学生の能力育成のため、カリキュラムは順次性・体系性があり、適切な教育課程・教育内容になっている。複数の学問</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

分野を横断的に学ぶカリキュラムにより、幅広い教養と豊かな人間性が涵養されている。英語による講義、短期留学(SA)制度、海外の教育機関とのオンライン授業を行って、国際性を高めている。

初年次科目、学部共通科目を複数設置し、1年生からキャリア教育を行っている。各学科が「基礎ゼミ」等を設置し、初年次教育を行っている。高大接続について、大学付属校一校に一部の専門科目の聴講を認めているが、提供科目や方法、対象高校を含めた検討が期待される。

オリエンテーション、ガイダンス、面談等を通じて、適切な履修指導が行われている。オフィスアワーやゼミナールの授業を通じた学習指導も適切に行われている。とりわけ成績不振学生に対する面談実施率を向上させる取り組みは評価できる。レポートや口頭発表への準備によって授業外の学習時間も確保されている。特に、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を学部として推進し、リアクションペーパーや双方向型授業の導入に努めている点は評価できる。

成績評価および単位認定基準はシラバスに掲載され、GPCA 集計表によって適切さが確認されている。「基礎ゼミ」では各学科で協議を行い、成績評価の平準化を図っている。また卒業論文の評価基準を明確に示している。学生には成績調査の機会を保障している。

学生の就職・進学状況については、キャリアセンターからの情報が教授会および学科会議で報告され、専任教員全員で共有されている。学生の成績分布については、GPCA 集計表によって各学科ごとに確認が行われており、進級状況については、年度末の教授会で審議することが制度化されている。

学部では、課題発見・解決に向けた学習を重視しており、卒業論文によって学習成果を測っている。卒業論文は、学内誌などにタイトルの一覧や優秀論文が掲載され、可視化が図られている。地理学科では、学外の研究会で優秀論文の発表も行われている。

「学生による授業改善アンケート」や「卒業生アンケート」の集計結果は教員に提供されている。ほかに意見・要望を聴取する「学生モニター制度」もある。教員向けの研修会や意見交換による組織的なFDの取り組みもある。しかし、授業改善アンケートの回答率は低く、教育課程の組織的な改善に利用しにくいという声があるので、モニター制度を含めた調査についての検討が期待される。

## 2 教員・教員組織

### 【2020年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

#### 【FD活動を行うための体制】※簡条書きで記入。

- ・「専任教員による授業相互参観」を実施している。
- ・教授会および各学科においてFD研修会・ミーティングを実施している。

#### 【2019年度のFD活動の実績(開催日、場所、テーマ、内容(概要)、参加人数等)】※簡条書きで記入。

##### 【教授会における研修会】

- ・2019年6月19日(第3回文学部定例教授会)、教員向け研修会「就職環境とインターンシップについて」、講師：柘田梨奈氏((株)リクルートキャリア)、63名
- ・2019年9月11日(第5回文学部定例教授会)、教員向け研修会「学修成果の把握について」、講師：安孫子信氏、小原文明氏(法政大学文学部)、58名
- ・2019年10月16日(第6回文学部定例教授会)、教員向け研修会「剽窃検知ソフト&授業支援システムの利用方法について」、講師：根橋巧氏(教育支援課)、60名

##### 【専任教員による授業相互参観】

- ・学部全体で7名(日本文学科1名、英文学科3名、史学科1名、地理学科2名)の教員が授業相互参観を行った。

##### 【各学科におけるFDミーティング】

- ・哲学科4回、日本文学科2回、英文学科7回、史学科2回、地理学科20回、心理学科はメーリングリストで実施。授業内容、指導方法の向上に関する意見交換を行った。

#### 【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

教授会において3回、教員研修会を開催した。

#### 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度第3・5・6回文学部定例教授会議事録
- ・2019年度教員による授業相互参観実施状況報告書(2019年度第9回教学改革委員会資料)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S	<b>A</b>	B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>全学で定められている「個人研究費」等の研究費の支給・執行・精算を学部事務課文学部担当で管理し、教員の研究活動を支援している。学会等を本学で開催する場合には、教授会でも開催を承認し、大学の補助を得られるよう支援している。学内の付置研究所に兼任所員や運営委員を選出し、当該教員の研究活動を支援するほか、大学全体の研究力向上にも努めている。</p> <p>『法政大学文学部紀要』を年2回刊行し、教員の研究成果の発表の場を設けている。また、各学科でも学内学会を組織し、研究発表会の開催、研究誌の刊行を行っている。</p> <p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・『法政大学文学部紀要』『法政哲学』『日本文学誌要』『英文学誌』『法政史学』『法政地理』『法政心理学会年報』</p>			

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入してください。なお、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画がある場合には、あわせて記入してください。特記すべき事項が無い場合には「特になし」と記入してください。

内容	点検・評価項目
・教授会を活用して教員向け研修会を積極的に行うとともに、各学科においても自律的にFDミーティングが実施されている。	2.1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

<p>昨年度、文学部では「専任教員による授業相互参観」を実施したほか、計3回の研修会が行われた。また各学科でも複数回、授業内容や指導方法の向上のためのFDミーティングが行われており、適切かつ組織的な活動が行われている。学部の紀要のほか、学科ごとの研究誌発行や研究会の開催により、教員の研究活動の活性化や資質向上を図っている。</p>
--

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。	
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。	
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。	
1	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。また、その結果、第6・8回教授会において、日本文学科・英文学科・心理学科のカリキュラムの一部改正を行った。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見	各学科において、カリキュラム・教育内容について検証し、必要に応じて改編を行うという目標は、適切に達成された。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		改善のための提言	より一層の向上のために、継続的に検証を行ってゆくことが大切である。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。		
	年度目標	講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。		
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	第6回教授会において、教育支援課根橋巧主任による授業支援システム、剽窃チェックソフトの利用法に関する研修会を実施した。 2019年11月27日に学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、リアクションペーパーの活用事例・課題に関する聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、リアクションペーパーの効果的な活用法について情報を共有した。	
		改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		アクティブラーニング・双方向型授業を促進するためのツールの活用に関する情報を提供したことは評価できる。ただし、ツールの活用に関する情報提供にとどまっているところは、今後の課題であろう。		
改善のための提言	アクティブラーニングを促進するためのより包括的な議論が望まれる。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。		
	年度目標	「学習成果の測定」に関する定義、先行事例、課題について情報を共有する。		
	達成指標	教授会において研修会を開催する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	第5回教授会において、安孫子信教授、小原文明准教授による研修会「学修成果の把握について」を実施した。 文学部質保証委員会において、優秀な卒業論文を書いた学生の学修活動について調査を行い、その結果を第7回教授会で報告した。 2019年11月27日に学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、学修成果の把握方法に関する意見・要望を聞きとり、第11回教授会で報告した。	
		改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		学習成果について包括的に検証し、情報共有を綿密に行ったことは特筆に値する。		
改善のための提言	-			
No	評価基準	学生の受け入れ		
4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体现する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。		
	年度目標	2019年度入試の実績と効果、特別入試（特に外国人留学生入試）の変更点の効果を検証し、2020年度入試の改革へ反映させる。		
	達成指標	執行部より入試経路ごとの入学実績、成績状況に関する情報提供を行い、入試小委員会、学科会議で入試改革について検討する機会を設ける。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。



No	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第3回・第4回入試小委員会において、近年の入学者資料等を踏まえて留学生対象指定校(日本語学校)の推薦基準の検討と改訂を行うと共に、外国人留学生入試の出願条件についても、近年の合格者の成績水準等を勘案して検討と改訂を行った。あわせて、一般入試・各種特別入試における英語外部試験の導入可否や出願基準の検討、グローバル系入試の導入の検討を入試小委員会及び各学科にて行い、英語外部試験の対象検定の追加、転編入試験での英語外部試験の導入拡大や出願基準の改訂を行った。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	入試制度に関する検証は十分に行えていると考えられる。ただし、いわゆる18歳人口の自然減にどう対応するのかについては、課題として残された。
		改善のための提言	18歳人口の自然減にどう対応するのかについて、議論が望まれる。
No	評価基準	教員・教員組織	
5	年度末報告	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
		年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
		達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第1回人事委員会において、専任教員の年齢構成について確認を行った。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	今年度、新規人事は1件しか行われなかったが、海外で博士号を取得し、在外経験の豊富な教員を採用したことは評価できる。		
改善のための提言	今後もこうした人事が継続されることを望む。		
No	評価基準	学生支援	
6	年度末報告	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
		年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。
		達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	各学科で春学期・秋学期とも成績不振学生に対する面談を行い、それぞれ第4回・第8回教学改革委員会で報告と対応内容の検討を行った。 本年度より面談に訪れない学生に対し、郵便による通知を制度化した。その結果、面談の実施率が向上した。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	各学科において、成績不振学生に丁寧に対応し、その結果を共有したことは大いに評価できる。		
改善のための提言	—		
No	評価基準	学生支援	
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	－	
	達成指標	②教授会において研修会を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第3回教授会において、(株)リクルートキャリアの榊田梨奈氏による研修会「就職環境とインターンシップについて」を実施し、学生の就職活動の現状への理解を深める機会を設けた。
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
所見		研修会を開催し、インターンシップについて理解を深める機会を設けたことは評価できる。ただし、学外企業からの情報提供にとどまっていることは課題と考えられる。	
改善のための提言	学生の姿は移り変わるので、今後も継続的に取り組みを行ってほしい。今後は、より大局的・中立的な情報提供の機会を設けることが期待される。また、学生と直に接しているキャリアセンターの職員に助言を求めることも望ましいであろう。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。	
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を行う。	
	達成指標	教学改革委員会、入試小委員会において左記の検討を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第3回入試小委員会において、転・編入試験における社会人入試制度の導入の検討を日本文学科に要請した。これを受け、日本文学科において導入の可能性に関する議論を開始した。
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	社会人入試制度の導入に関する議論が開始されたことは望ましい。今後わが国の18歳人口が減少する中で、入学定員をどう考えるのかは重要な論点である。現状の定員を維持し続けるならば、外国人留学生や社会人を対象とした学習機会の提供について、いっそう考えざるを得なくなるのではないかと考える。
	改善のための提言	通信教育課程との関係性を考慮しながら、社会人入試制度等について積極的に検討が行われることを望む。	
<b>【重点目標】</b>			
<p>〔年度目標〕「学習成果の測定」に関する定義、先行事例、課題について情報を共有する。</p> <p>〔達成指標〕教授会において研修会を開催する。</p>			
<b>【年度目標達成状況総括】</b>			
<p>「学習成果の測定」に関する情報の共有を年度目標とし、教授会における研修会の開催を達成指標に掲げたが、研修会の開催に加え、文学部質保証委員会による独自の調査活動や、学生モニター制度を利用しての情報収集も行われ、予想以上の成果があがった。学習成果をめぐる現状と課題が様々な角度から明らかとなり、教員間の理解が深まった。また、成績不振学生に対する面談指導にあたっては、本年度より面談に訪れない学生に対し、郵便による通知を制度化したことにより、面談の実施率を向上させることができた点も特筆されると考える。このほか、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携に関する諸項目については、所期の目標が達せられ、中期目標の達成に向けた取り組みが順調に進んでいるといえる。</p>			

**【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】**

文学部における2019年度目標の達成状況について、全評価基準で概ね目標を達成できたと判断できるが、とりわけ「学習成果の測定」に関しては、高く評価できる。研修会「学習成果の把握について」を開催し、専門家の知見を学部内で共有した。さらに優れた卒業論文を書いた学生の学修活動を調査し、学生モニターへのヒアリングも実施し、いずれも教授会に報告し、教員間で共有した。

教育方法に関して、リアクションペーパーの活用事例についても、情報を共有した点も評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

学生支援に関しても、成績不振学生に対する面談について、郵便による通知を制度化し、実施率向上に繋げたことも評価できる。

#### IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。
	年度目標	学生を対象に、アクティブ・ラーニングや双方向型授業の効果・要望を聴き取り、教員間で情報を共有する。
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。
	年度目標	初年次教育（「基礎ゼミ」等）を対象に、「学習成果の測定」に関する事例、課題について情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。
	年度目標	2021 年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。
	達成指標	入試小委員会で新たな留学生入試の効果の検証の機会を設ける。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
	年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。
	達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
	年度目標	②教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。
	達成指標	②教授会において研修会を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を継続する。
	達成指標	入試小委員会、学科会議で検討の機会を設ける。

**【重点目標】**

2021年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。

**【目標を達成するための施策等】**

これまでの留学生入試の結果を丁寧に分析し、学力・日本語力をより精査できる入試制度を執行部が策定し、学科主任会議で検討を行う。入試の実施後は執行部で課題を確認し、入試小委員会でさらなる改善に向けて審議する。

**【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】**

文学部の2020年度目標については、前年度を継承しながら概ね適切に設定されている。

カリキュラム、教育内容を検証する学科会議を開催し、時代の要請に見合ったカリキュラムの見直しを行うとともに、教授会においてアクティブ・ラーニングや双方向型授業、学習効果の測定に関し、情報共有の機会を設けることは、学生の主体的な学びを実現する上で成果が期待される。

留学生入試の制度改革にあたっては、学力や日本語力の精度を高めることに留まらず、留学生の学習意欲を高め、維持する教育サービスの提供も検討課題であると思われる。

**【大学評価総評】**

文学部は、各学科の専門分野や教育方法に違いはあるものの、学部教育の目標、方法、学習効果については学部内で共有を図り、結果として教育効果を上げている。卒業論文を必修科目に位置づけ、初年次からゼミ形式の授業を行うなど、論文作成に向けたカリキュラムになっている。また、学部全体としてアクティブ・ラーニングの導入を推進しており、リアクションペーパーや双方向型授業の活用についても積極的に進めている。

なかでも「学習成果の把握」について、昨年度に学部内で知見を共有できた点は高く評価できる。また、優れた卒業論文を書いた学生の学修を分析したり、学生モニターの意見を聴取したりして、教育に活用する意欲も認められる。

学生の成績分布、就職状況についても、学部・学科の専任教員が把握できるようになり、改善が見られた。

他方、「学生による授業改善アンケート」については、その回答率が低いことから、アンケートの利用方法だけでなく、実施や必要性、補完する取り組み等についても検討が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。